

論点

元気で役立つ海岸林 再び



よしざき 吉崎 眞司氏
東京都立大学副学長 環境学部長。日本海岸林学会会長。静岡大大学院修了。コンサルタント会社などを経て現職。農学博士。60歳。

海岸林は全国各地で著しく劣化している。静岡県の遠州灘では、立ったままの状態ですべての葉が茶色く枯れた松が並んでいる光景が見られた時期もあった。日本の海岸林の多くは砂浜にあり、海からの強風、高潮、飛塩、そして砂浜からの飛砂を防ぎ、人家や畑を守る機能がある。16世紀に武田氏と北条氏の戦の後に植えられた静岡県沼津

市の千本松原が一番古い人工的な植栽とされる。日本全国の砂浜にはかつて塩田があり、海水から採った濃い塩水を釜で煮た。松の木を燃やせば火力が強い。葉っぱは畑の肥料になり、ご飯を炊く時の焚き付

けにもなる。松は、海岸沿いに住む人々と密接な関係があり、大事にされた。もともと乾燥した明るい、栄養分があまりない場所を好む樹木。人々が落ち葉かきをするので、林の下には栄養分がたまず、美しい松

林が維持された。1978〜81年をピークに、海岸林の松がマツ材線虫病で枯れ、大問題になった。明治時代に長崎で最初に見つかった病だ。マツノマダラカミキリという昆虫のお腹の中にいるマツノサイセンチュウが幹や枝の中に侵入して増殖し、マツを枯らしてしまう。

第2次大戦後、燃料に石油炭を使うようになり、人が松林に入らなくなったことも大きい。そうすると落ち葉や枝が砂地の上にとまり、栄養分が増え、林の外から運ばれてきた広葉樹の種が芽生えて育つ。松林が広葉樹のやぶのようになってしまう現象が全国各地で見られるようになった。

一方、海岸浸食で砂浜がなくなるなどの問題も起きた。海岸林は農林、海岸浸食は土木、海岸生態系は環境に関連する行政が担当し、海岸全体の環境保全に對して一貫した方針を打ち出しにくい場所でもある。

2011年3月に発生した東日本大震災では、津波を防ぐ効果がなかっただけでなく、津波で倒された木が流されて家を壊すなどの二次災害を引き起こした。一時は強く非難された。その後、林野庁の検討や森林総合研究所の研究により、海岸林を盛土や堤防と組み合わせれば減災効果が大きいことや、クロマツと広葉樹の低木を配置して適切に管理すれば、津波に對し抵抗力のある森林を作れることがわかってきた。

今、求められるのは、日本の海岸に元気で健全な海岸林を復活させることだ。ただ、成長に応じた樹木の密度管理や盛土造成の方法など明らかにすべきことは多く、海岸林作りの技術や知見は十分でない。防潮堤と組み合わせた海岸林作りも始まった。静岡県は浜松市で、砂と砂利をセメントで固めた上に盛土をして緑化する方法を試みており、注目されている。大事なことは、技術的な観点だけではない。地域の人々に受け入れてもらえないと、結局はうまくいかない。皆が知らん顔をし、手入れをすることも考えないようでは、どんな海岸林を作っても意味がない。新たに作る海岸林は、地域住民に必要とされ、親しまれる林にしていきたい。(聞き手・編集委員 河野博子)

●この記事・写真等は読売新聞社の許諾を得て転載しています。無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。